



1966-1972

# '71徳島インターハイ 寄せ鍋の蓮華草が咲いた夏。



昭和46年8月、インターハイ出場。於、徳島  
後列左より、堀・大谷・上垣・松崎・辰巳・神部・井上・木村・藤井・長谷川  
前列左より、渡辺・森下・守田・辻村・柳・堂免・大橋・永原・佃先生

## 夏がくれた“宝物”

●テニス部、剣道部、陸上部、それに弓道部や地歴部からみんなが集まって、29期のサッカー部の原型ができたのは、中学3年の終わりのころだった。そんなバッタモンの寄せ鍋みたいなチームが後に兵庫県を制覇し、昭和46年のインターハイに出場することになる。つい昨日のように思うのだが、この時、今をときめく曙も貴ノ花もまだ生まれてはいない。ぼくら29期もいつしか、いいおやじになっちまっている。—光陰矢の如し—

●公式戦で「負けた」という記憶があまりない。出場した大会すべてに優勝したわけでもない。29期は7回も抽選負けをしている。当時PK戦はなかった。延長、再延長をして同点の時は、コインの裏表で勝敗が決まる。主将井上は7回抽選に臨んで、7回ウラオモテをはずした。しかし誰も彼を恨んだりしなかった。みんな抽選になったら負けと思うことにしていた。主将井上は、世界史の時間、最後部の席で100円を相手に抽選の練習をしていた。—人間万事塞翁が馬—

●インターハイ出場が決まったのは高校3年の6月だった。兵庫県大会で負

ければ、それがぼくらの引退試合と思っていたのに負けなかった。インターハイは8月に徳島で行われる。受験勉強もしなくてはいけない。成績はみんな悪かった。シュバイツァー校長に後ろ指をさされずに、インターハイに行くには成績を上げるしかない。そこで特に成績のすぐれない4人を佃先生の母上のお宅に幽閉し、俗世間から隔離して勉強させるという作戦がとられた。週に1回か2回、葺合高校のサッカー部監督藤田先生が数学を教えにきてくれた。「ええかキミら、ベクトルちゅうのはサッカーでいうたらパスを出す方向と力加減や」そう言われて、わかったような気がした4人は、けな



昭和46年、兵庫県大会優勝。



インターハイ1回戦、FW堂免のシュート。

げだった。

— 及ばぬ鯉の滝登り—

●佃先生の母上は1か月近くも、選りすぐりの4人のために炊事洗濯に追われた。先生は厳しくてこわかったが、母御はやさしかった。こうしてぼくらはシュバイツァー校長に後ろ指をさされながら、その年の7月30日徳島行きの船に乗った。高校のスポーツ界で全国大会出場ともなれば学校だってそれなりに名誉な事だし、それなりのメリットを考え、それなりに予算を組む。しかし、ぼくらが後ろ指をさされた分だけ予算は出なかった。ユニホームは福助のUネックの肌着に、ペンキで背番号を書いた。でも、ぼくらには身分相応だった、と今思う。

— やはり野におけ蓮華草—

●全国大会の1回戦は、鳥取県代表の米子工業だった。彼らを見て驚いた。盛夏のころ8月というのに彼らは濃紺の長袖のユニホームを着ていた。涼しげな福助の白組は、長袖の青組を翻弄し4対0で勝った。

2回戦、相手は前年度全国制覇の、静岡県代表浜名高校。手ごわいというより格が違うと思った。しかし、NHKが全国放送するというのでみんな単純に喜んだ。ガールフレンドに電話した奴もいる。アナウンサーは背番号を頼りに放送する。主将井上は宿舍にユニホームを忘れ、2年下の宮本に借りて試合に出た。井上がドリブルしてもヘディングしても、アナウンサーは

「宮本！」と絶叫していた。

— 開けて悔しき玉手箱—

●この試合が引退試合になった。前半俊足大橋が浜名のボックスに走り勝って右45度から先制の1点をたたきこむ。しかし、前半終了直前に1点。後半にも1点を許してぼくらは負けた…

腹も出た。髪の毛もさみしくなった。でも、あの夏に得たモノはヨメさんより、いとおいしい。

[辰巳 隆一]

昭和46年6月8日付、神戸新聞。